国際研究論叢　18（2）：111～125，2005

アウシュヴィッツの人間（5）

ヘルマン・ラングバイン
訳：柴　嵜　雅　子*

Menschen in Auschwitz

Hermann LANGBEIN
Übersetzt von Masako Shibasaki*

キーワード
アウシュヴィッツ、ホロコースト、ラングバイン

＊「アウシュヴィッツの人間」の（1）～（4）は、『大阪国際女子大学紀要』第25号－2、第26号－1、第26号－2、第27号－1に所収。

＊ＳＳ医

アウシュヴィッツの監視部隊に配属されていた医師たちは、他のＳＳ指導者とは異なっていた。彼らは大学を卒業していたが、他のＳＳはたいてい不十分な学校教育しか受けていない。また医師は戦争勃発後に加わったが、他の多くのＳＳはもう何年も前からアイケによる訓練で叩き上げられていた。

そのため医師は他のＳＳほど心構えができていなかったけれども、絶滅計画においては特別な役目が割り当てられた。選別の際、ガス室で死ななければならない者を決めるのは通常、医師だったのである。医師の診断に基づいてガス室行きが決定されるという虚構を保持するために、最高指導部がこのように指示したのか否かは明らかではない。ナチスが最初の大量殺戮作戦を精神病患者に対して実行したときも、「安楽死」施設でガス栓をひねることを許されたのは医師だった。

殺人機構において医師に割り当てられた任務は、医師としての職業教育に真っ向から反するため、少なからぬ医師に葛藤が生じた。それがもっともひどかったのは、医業を真剣に考え、ナチズムを盲信していなかった医師である。

ＳＳ医はその枢要な地位ゆえに、囚人から非常に注意深く観察されていた。良心の葛藤を抱いているため囚人が利用できそうな医師を見つけ出すことは、途方もなく重要だったからである。囚人医と書記は、働くときにＳＳ医と一緒だったので、そのような観察をするのにもっとも恵まれていた。おまけに多くのＳＳ医は年若く未熟で、収容所で勤務する

＊しばさき　まさこ：大阪国際大学人間科学部教授〈2004.９.27受理〉

期間を利用して医業の研鑽を積もうと努力していた。それゆえ何人かの医師は、囚人医と専門的な話をしたがった。それどころか、公然と囚人医から学ぶことさえ憚らなかった。専門上の接触は個人的な繋がりへと発展した。それを促進させた一因は、他のＳＳ指導者の知的レベルが医師とはひどく異なっていたことである。一般にＳＳでは教養や知性が軽蔑されており、医師はそれをＳＳ指導者から感じさせられていた。それゆえＳＳ医は、囚人医と書記の知的能力に釣られて、仕事上の必要を越えた話をしたのである。

私はダッハウ収容所で囚人看護室の書記をしていたので、ＳＳ医との付き合いは経験済みだった。ダッハウで私は、医師に向かって規定通り「大尉殿」「中尉殿」と呼びかけないようにしていた。いつも「博士」という呼称を使った。ダッハウでもアウシュヴィッツでも、これを医師に禁じられたことはない。収容所では普段聞かないこの呼称を使うと、医師の話し振りは通常のぴりぴりした軍体調が抑えられて、もっとゆったりした文民風になり、個人的な色合いも出る。そのことに気が付いたので、私は「博士」と呼ぶようにしたのである。軍隊式ではない呼称を使い、指示された「結構であります！」という硬い言い方を避けて、オーストリアなまりで柔らかく「はいどうぞ」と答えると、業務以外の話も大概スムーズに進んだ。ＳＳのアウシュヴィッツ医務長の書記として働くことを通して、私は医務長と仕事上の関係を持っただけでなく、大量の煩雑な手続きを私に頼っていた他のすべてのＳＳ医とも身近に接した。さらに収容所の医師の行動について友人から聞いたことも、注意深く心に留めていた。

類型化の常として、これらの類型も完璧なわけではないが、囚人の観点から見ると、ＳＳにおける医師は三つのタイプに分けられる。絶滅機構にいやいや協力する医師、無感覚になってひたすら全命令を遂行する医師、命令された殺人以外に「努力点のための課題」までこなす医師の三種である。

私が観察できたＳＳ医、つまり1942年８月以後アウシュヴィッツにいた医師の中で、フリードリヒ・エントレスは「努力点のための課題」を率先して行なうタイプの極限を体現している。彼は1914年、ポーゼンの生まれで、父親は大学図書館に勤務していた。1941年の初頭、エントレスは医学の勉強を終えたばかりでグロス・ローゼン収容所に行き、そこから1941年12月、アウシュヴィッツにやって来た。1942年中頃、彼は博士論文を提出せずに博士号を授与された。そんなことができたのは、東部地域出身のドイツ人に対する優遇措置のおかげである。

エントレスは中央からの命令を殺害許可証と解釈し、注射による殺人を病棟に持ち込み、ＳＳの衛生兵が一人で速やかに滞りなく、毎日100人以上の患者をフェノール注射で殺せるように整備した。すぐにエントレスは衛生兵にこの汚い仕事を任せ、彼自身は殺される患者の決定と注射の監督しかしなかった。

エントレスは囚人医から学ぶことを厭わなかった。ポーランド人の肺の専門家、ヴラーディスラフ・トンドスのもとで、エントレスは同僚のイエーガーとフェッターとともに、約三ヶ月間、結核患者の治療に気胸術を使った。この間、彼は患者が普段の倍の食糧配給を受けられるように手配した。そうしないと、治療の結果の観察に支障が生じ、患者も死

んでしまうかもしれないからである。エントレスとその同僚がこの治療への関心を失った後、患者はフェノール注射で殺された。これはエントレスだけが命令できたことだ。この事件が起きたのは1942年末だったと思う。

エントレスはさらに別のポーランド人医師、ヴラーディスラフ・デーリングから外科学を学んだ。彼は一度、発疹チフスの患者の血液を使って健康な人間に感染させるよう命じた。そのような感染の結果を研究したかったからである。

エントレスはアウシュヴィッツの病棟でこれまで実行された絶滅作戦のうち、最大のものを指揮した。1942年８月末、発疹チフス患者と回復期にある人、さらには何人かの看護人まで死へと選別したのである。すでに治りかけている者の中に、ポーランドの元保健省長、ブヤルスキがいた。彼はもう働いても大丈夫なので、病棟に留まることを許してほしいとエントレスに願い出た。ブヤルスキの行き先は保養所で、そこでは医師である彼にとってやりがいのある仕事が待っている、とエントレスは答えた。ブヤルスキはこのＳＳ医の言葉を信じ、自分はガス室へ行くはずのトラックに他の人と一緒にもう載せられているので、一度降りて、聴診器を取りに行かせてほしいと頼んだ。エントレスは、サナトリウムで聴診器はもらえるから持って行く必要はないと語り、この皮肉な芝居を最後まで続けた。

エントレスはその野心ゆえに、アウシュヴィッツの中でももっとも徹底的に絶滅を進める部署と密接に繋がるようになった。つまり、政治部との緊密な関係を築いたのである。ヴィルツが1942年９月に医務長となり、その結果、エントレスの上司となった後も、その関係は揺るがなかった。しかしエントレスが知らなかったはずはないのだが、ヴィルツは政治部と正反対の立場を採っていたため、すぐにグラープナーと衝突し、両者の対立は悪化するばかりだった。

この対立の原因は、中央からの命令が不明瞭でしばしば矛盾していたことと、その解釈がグラープナーとヴィルツで異なっていたことである。肺結核患者はアウシュヴィッツでは治らない上、生きている限り感染源となるので、「特別措置」にすべきであるという上司の命令を、医務長のヴィルツは字義通りに取った。その際、彼が拠り所にしたのは、死者数を下げよという内容の別の指示だった。彼の見解によれば、殺すのは結核患者だけで、他の囚人は殺してはならなかった。グラープナーとエントレスはベルリンからの指令を、すぐに労働可能になる見込みのない回教徒と病人は全員、注射で殺してよいという許可として受け取った。ヴィルツの前任者たちは注射による殺害をすでに導入しており、彼らの自発性は明らかに好ましいと見られていたからである。こうした解釈に従って、エントレスは診療室へ連れて来られた裸の患者をチラッと見るだけで決定を下した。しかしヴィルツは、自分が死へと定めた者はみな結核にかかっていたと報告した。また別の箇所には、エントレスが彼を欺いていることが証明された経緯が記されている。

このようなわけで、基幹収容所ではフェノール注射による殺害が中止され、エントレスは収容所勤務医としてモノヴィッツへ転勤になった。このことは基幹収容所の病棟にとっては明らかな改善だったものの、モノヴィッツの収容所は悪化した。オスカール・ベルテンは「エントレス博士は囚人の選別に関しては特に徹底していた」と証言している。また

モノヴィッツの病棟の古参、シュテファン・ブジアセクもエントレスを「絶滅しようという意志満々」のタイプだと言っている。ただエントレスは、注射による殺害をモノヴィッツに持ち込んではいない。

両者の際限のない対立ゆえに、ヴィルツがエントレスを昇進させることはなかった。ヘスの配置転換とグラープナーの逮捕によって生じた好機をヴィルツが利用し、エントレスを自分の持ち場から完全に遠ざけたとき、初めてエントレスは出世できた。すべての強制収容所を管理する医師で、ＳＳ大佐のエノ・ロリングが、ヴィルツとエントレスの対立の原因を知らされて、エントレスをマウトハウゼンの医務長に任命し、ＳＳ大尉に昇格させたのである。これはエントレスのみならず、彼と同じ考えの医師たちにとっても励みになった。

エントレスが他の人以上に「情け容赦なく」残酷になったのは、際立って貧相な風采や病的な気質のせいなのだろうか。「民族ドイツ人」だったので、生粋のドイツ人とは同格に思えず、躍起になって殺すことで、この欠点を埋め合わせようとしたのだろうか。

フランツ・フォン・ボートマンも自発的な殺害を行なった。アウシュヴィッツにいたのは短期間だけで、発疹チフスにかかった後、二度と戻ってこなかったので、彼は余り知られていない。1942年夏、ボートマンは一時的に医務長を務めた。彼が実施したことは少なくない。それを彼に命令できたような上司は、収容所にはいなかった。部下の衛生兵に任せたエントレスとは異なり、ボートマンは自らの手でフェノール注射を打った。当時はまだ基幹収容所の一部を仕切って女性収容所としていたが、収容所の古参によると、そこの病棟でボートマンは「多くの人を注射で殺した」。しかも彼は心臓ではなく血管に毒を注入したので、断末魔の苦しみが長引いた。

ある日、スロヴァキアのユダヤ人女性が働くことを拒否し、仲間にも仕事を止めるよう促した。そのため歩哨が彼女を撃ち倒した。マンカ・シュヴァルボヴァの記憶によると、この若い女性は胸部と腹部を負傷して病棟に運ばれたが、ボートマンが包帯をすることを禁じた。彼の命令で、彼女は見せしめのために、出血多量で死ななければならなかったのである。また別の折に、二人の若い女性が病棟に連れて来られたとき、一人は腹部を、もう一人は大腿部を撃たれていたのだが、ボートマンは再び治療を禁じ、二人を毒物注射で殺した、とシュヴァルボヴァは報告している。

命ぜられた以上に人を殺した収容所医のなかでは、ヨーゼフ・メンゲレ博士がもっとも有名になった。同僚の多くとは異なり、彼は仕事に対する猛烈な意欲を持っていたからである。しばらくの間、女性収容所は彼の管轄下にあった。オルガ・レンギエルは次のように書いている。「下品で口に出しにくいような質問を女性にする機会があれば、メンゲレは決して逃さなかった。ある日、兵隊の夫と何ヶ月も会っていない女性が妊娠していることを耳にしたとき、彼がそれを面白がっていたことは傍目にも明らかだった。また別の時には、どうやら収容所に来てから妊娠したらしい15歳の少女を発見した。メンゲレは彼女を長いあいだ根掘り葉掘り尋問し、事の次第を聞き出そうとした。そして好奇心が満たさ

れると何の躊躇もなく、この少女を次の選別の犠牲にした」。

若い娘が選別されたばかりの母親の命乞いをメンゲレにしたことがあった。その模様を覚えていたマンカ・シュヴァルボヴァは、「命乞いの答えとして、メンゲレはその娘も一緒にガス室へ送ってしまいました」と端的に語っている。

メンゲレの性格をもっとも明瞭に示しているのは、アンナ・ズスマンが彼から被ったことだろう。1944年８月、アウシュヴィッツへ移送されたとき、彼女は妊娠していたが、入所の際の選別では気付かれなかった。妊娠を隠している女性が何人もいることを知らされた収容所管理部は、面倒な取調べを省くため、「妊婦は全員、毎日４分の１リットルの牛乳を支給される」と発表させた。ズスマンは仲良くしていたポーランド人の女医から、絶対に名乗り出てはいけないと忠告された。「それは厳しい試練でした。私たちは１日に６人につき杓子２杯のスープぐらいしかもらえなかったからです」とアンナ・ズスマンは当時を思い出して述べている。一人の女性が妊娠していると名乗り出て、実際に数日間、約束通りの牛乳をもらえた。それを見て他の女性も妊娠を明かしたが、ズスマンだけは黙っていた。名乗り出た女性はみな収容所から連れ去られ、二度と戻って来なかった。

労働の際に重いものを持ち上げなければならなかったので、アンナ・ズスマンは早産した。「点呼の前に陣痛が始まりました。それでも『気をつけ』をしていなければなりませんでした。ようやく点呼が終わると、私はブロックに忍び込み、毛布の下で出産しました。それは男の子で、まだ生きていました。私は物音を立てないように、とても気をつけていましたが、それでも叫び声を上げてしまったのです」。それをメンゲレが聞きつけた。「彼は赤ちゃんを取り上げると、火の中に投げ入れてしまいました。それはまだ後産も出て来ていないときのことです」。あれから20年たっても、アンナ・ズスマンはメンゲレという名前を聞くと蒼ざめてしまうという。それは彼女だけではない。

他のＳＳ医が抑えられなかった女性収容所での発疹チフスを、組織化の才と自発性を具えたこの「無慈悲な冷笑家」がどのようにして制圧したかを、エラ・リンゲンスは述べている。まず、彼はこの病気にかかったユダヤ人女性1500人をガス室へ送り、詰め込み状態の収容所のバラックを一つ空にして、そこを消毒し、新しいわら布団と清潔な毛布を用意させた。次に、もう一つ別のバラックの病人からシラミを徹底的に駆除し、裸にして、清潔にしたバラックへ移した。こうしてまた空になったバラックを消毒し、寝具を変えさせ、という具合に繰り返した。すると本当に伝染はストップした。ただ、新しいバラックを設置したりすれば、最初に大勢を死に追いやらずとも同じ成果が達成できるということなど、メンゲレの頭には思い浮かばなかったようだ。男性用収容所の病棟でも、1944年１月、同様の方法で発疹チフスは撲滅された。「病棟の伝染病は、数百人の人命を犠牲にして制圧された」とアルフレート・フィデルキーヴィチは書いている。おそらくメンゲレの方法を真似たのだろう。伝染病の撲滅成功にメンゲレが満足していたことは、消毒のカポー、フェリクス・アマンの話から分かる。アマンはメンゲレの監督の下、ジプシー用収容所のシラミ駆除を実行して成功した。その報酬として、メンゲレは彼にイワシの缶詰を与えた。それどころか「お前も生きなくちゃな」と言いながら、火酒を一壜、渡したこともあった。

その頃、ジプシー用収容所では、ヨーロッパでは通常まず見られない「水癌」という病気が流行っていた。栄養素の不足から生じるこの病気は、子どもの頬を侵食し、実際、頬に穴が開くこともあった。当時この収容所部門で死体運搬をしていたチェルニは、焼却所へ移すまで死体を集積しておく倉庫から、水癌で死んだ子どもを引っ張り出し、メンゲレの監督下、頭を胴体から切り離さなければならなかった。メンゲレはそれらの頭を、化学薬品の詰まったガラス容器に入れさせた。

ジプシー用収容所の囚人医はエプシュタインだった。彼はかつて、プラハにあったドイツの大学で小児科学の講義を行なっていた。メンゲレは彼に「収容所から出すわけにはいかないが、私のために論文を書いてくれたら、ここでの生活をましなものにできるがね。テーマは自由に選んでもらっていい」と言った。エプシュタインは水癌について論文を書くことにした。こうしたやり方で患者を救うためである。メンゲレも承諾した。病棟には水癌科が開設され、45人のジプシーの子どもが収容された。メンゲレは薬品と通常よりいい食事を手配した。彼自身が収容前と治療後の子どもたちの写真を撮った。この科の誇りとなった顕著な成功例は、スデンカ・ルージチュカという12歳の女の子で、この子は頬に穴が開き、そこから歯が見えていたのに、治療によって再びその穴が塞がり瘢痕になったのである。

当時は双生児研究が特に奨励されていた。「支配者の人種」の増加を加速させる方法を開発できれば、その科学者は最大の助成と最高の評価を得られると考えてよかった。メンゲレはこの分野の専門家で、前線に派遣される前は研究所で遺伝学の研究所をしていた。

降車場で囚人を選別する仕事は、ＳＳの全医師が輪番制で担当した。メンゲレは自分の順番でないときにも降車場に姿を現し、双子を探し出した。彼の命令で双生児は特別バラックに入れられ、普通よりいい食事が与えられるが、詳細に検査され、測定され、スケッチが描かれた。ジプシー用収容所にあった児童ブロックの世話をしばらくしたルーツィエ・アーデルスベルガーは、メンゲレの回診を次のように描いている。「彼はポケットに飴を一杯詰めてきて、一つずつ配る。遊び半分で、子どもに飴を投げたりする。飴は全員には行き渡らないが、今日でなければ明日か明後日、どの子もいつかは飴をもらえた。この収容所医が現れるや否や、子どもたちの顔は輝いた。一個の飴、ただそれだけで子どもたちは苦しみを忘れていた」。

メンゲレは研究済みの双生児を飴で釣って自分の車の所まで連れて行き、ドライブに誘い、焼却所へ運んだ。双生児の研究者が、被験者を同じ日に解剖して体内の器官を比較できたのは、世界中でもここだけである。メンゲレは双生児が同時刻に同じ原因で死ぬように手配した。焼却所の一つに彼は病理学・解剖学科を設立させた。移送されてきたハンガリーのユダヤ人の中から病理学者のミクロス・ニスリを引き抜いて、この科に配置した。アウシュヴィッツを生き延びたニスリは、多岐にわたる臨床研究の結果とレントゲン写真が、双生児の死体と一緒に机の上に並べられていたと述べ、「欠けていたのは解剖所見だけで、私がそれを作成しなければならなかった」と付け加えている。メンゲレは「顕微鏡と試験管に囲まれ、私の横に何時間も座っていたり、手に血が付いたまま返り血のかかっ

た白衣を着て、解剖机のそばでずっと立ち続けたり、まるで研究に憑かれたようだった」。

被験者の死因はニスリには隠し通せなかった。「心臓を調べていると、左心室の外側に小さな丸い薄紅色の斑点が見つかった。それは心臓に注射針が刺さったためにできたものだった。左心室を切開すると、普通はそこから血液をスプーンで取り出し、その量を計る。だが今回、それは実施できなかった。血液が凝固していたからである。私はその凝血をピンセットで取り出し、匂いをかいでみた。クロロフォルム独特の強い匂いがした。ベルリン（ダーレム）の遺伝学研究所も興味を持ちそうな部位は保存し、そのような物件の郵送規定に応じて専門的に荷造りした。急いで送付してもらうために、小包には『速達。重要軍事物資』という判が押された」。

報告書書記の記憶によれば、ジプシー収容所には２歳から14歳の全部で60組以上の双子がいた。1944年８月１日、収容所のこの区域の被収容者が殺害されたとき、７組の双子しか生き残っていなかった。

ルードルフ・ヴィテクという名の囚人医は、メンゲレの指示によりこうした子どもたちを検査しなければならなかった。彼はディーター・シュミットとハンス・シュミットという双子について語っている。シュミット兄弟はドイツから来たジプシーで、３歳半だった。メンゲレはこの子たちをドライブに誘い、自分の車に乗せて行った。帰って来ると、メンゲレはディーターとハンスを検査した内科医は誰かと訊いた。ベルリン出身のベノ・ヘラーが名乗り出た。すると怒ったメンゲレはヘラーを怒鳴りつけた。「君の腕はなっていない。この双子の肺は異常なしと書いてあったが、解剖の結果、ディーターの肺尖はおかしかったぞ」。

奇形や小人など、異常を持った人々には、双生児と同じ運命が待ち受けていた。メンゲレはぞくぞくと移送されて来る集団から、そうした人々を降車場でより分けて詳細に検査し、殺して解剖したのである。

メンゲレは当時、栄誉が獲得できそうだった他の領域でも実験を実施した。エラ・リンゲンスは次のように述べている。「ダグマーという女の子のことを覚えています。その子がアウシュヴィッツで（1944年、オーストリア人の母親から）生まれたとき、私が出産を手伝ったんです。メンゲレが目に何かを注入した後、ダグマーは死んでしまいました。メンゲレは目の色を変えようとしていて、ダグマーを青い目にしたかったんです」。メンゲレがそのような実験を行なったのは、ダグマーだけではない。ブロックの古参としてビルケナウの児童ブロックを管理していたロムアルダ・チェシエルスカの話では、メンゲレは目の色の実験のために、このブロックから36人の子どもを選び出した。その子どもたちは痛がり、目は化膿したが、徐々にまた普通に戻った。ある子は片目をほぼ失明したという。

メンゲレは広く目の色の異常と取り組んでいた。彼の師はフォン・フェアシューアー男爵で、当時はカイザー・ヴィルヘルム研究所で働いていた。この教授は後に私と話したとき、メンゲレが右と左で色が違う非常に興味深い目の標本を、カイザー・ヴィルヘルム研究所にいくつか送ってきたことを認めた。それはジプシーの目で、メンゲレは色の異常ゆえに、その持ち主たちを殺させたのだ。私が教授にそう言うと、彼は驚愕の色を見せた。

自分の弟子がこんな標本をどこから手に入れたか、考えたことがなかったのだろうか。

仕事に夢中で良心の咎めなど感じないメンゲレについて、間違った風聞が生じたとしても驚くには当らない。たとえばオルガ・レンギエルが聞いたものでは、メンゲレは前線に行かなくてすむからというだけの理由で残酷な実験を行なっているという噂がある。確かにアウシュヴィッツにはそのような理由で人体実験を行った医者は何人もいるが、メンゲレにはこれは当てはまらない。私はＳＳ看護室でメンゲレの健康診断書を調べたことがある。それで分かったのだが、彼は東部戦線のＳＳ部隊にいたけれども、前線勤務不能と判定されたため、1943年春にアウシュヴィッツに配置転換されたのである。彼が誇らしげに一等鉄十字勲章を身に付け、まだ戦線を見たことのない同僚に対して、自分はすでに戦闘を経験したことを見せ付けたがったのを私は覚えている。後から知らされたことだが、メンゲレは前線勤務にはもはや不適格であることを確認すると、自分の科学研究のための十分な人的資源がアウシュヴィッツで見出せることを指摘して、この収容所への配置転換を願い出たのである。

メンゲレをよく知っている人は、彼をサディストの素質のある癇癪持ちだとは言わない。彼は囚人と話すときはいつも丁寧で、口調もとても穏やかであり、普通のＳＳがとるような粗野な言動はなかったことを、チェルニは強調している。ビルケナウの囚人医、ロベルト・レヴィの記述によると、選別の後、彼がこれこれの囚人はもうじき働けるようになるかもしれないと指摘すると、メンゲレはその人たちの名前を死のリストから削除してくれたことが何度かあったという。もっとも、明らかに衰弱しきっている人を救おうとしたとき、君も選別された人と運命を共にすることになるぞ、とメンゲレはチェルニを脅したそうだ。

メンゲレのために検査を行なっていたポーランド人のある女性病理学者は、妊娠中だったので、メンゲレの援助でアウシュヴィッツから出ることができた。その後も彼女はクラクフで、メンゲレのために組織標本作製を続けなければならなかったが、出産したときには彼から花束が送られてきたという。

メンゲレは悪名高く、絶滅収容所のＳＳ医と言えばメンゲレと思われている。そんな彼の前歴は示唆に富む。メンゲレは1911年ギュンツブルク生まれで、裕福な両親から「よきカトリック教徒として」しつけられたと言われている。大学時代の学友によれば、彼は陽気で愛想がよく人気があった。ひどく野心的であった点を除けば、友人たちの記憶に後のメンゲレを示すような特徴はない。さらに狂信的なナチでもなかったという。1939年に記入された質問紙で、彼は1937年５月１日に国家社会主義ドイツ労働者党に入党したが、党でもＳＳでも役職には就いていない、と回答している。

遺伝学研究所所長で彼の師に当るフォン・フェアシューアー教授は、1940年３月12日付けの文書で、メンゲレの絶対的信頼性を保証し、次の言葉を添えている。「本研究所における研究、とりわけ血統検査の遺伝学・人種生物学的な鑑定を通じて、一般的な医学的知識の他に、特殊な人類学的知見も彼は具えている」。フェアシューアーの代理で行なった講義では、メンゲレには難しい精神的領域に関する表現能力もあり、大学研究者としてふさわしいことが証明されたとも書かれている。メンゲレは医学の他に法学も学び、二つの

学部で博士号を取得している。

タデウシ・シマンスキーとルードルフ・ヴィテクの両医師は、囚人としてメンゲレと接していた。彼のことをシマンスキーは非常に知的だと語り、ヴィテクは狂信的ナチで冷酷、不可解で斜に構えた狡猾な切れ者と呼んでいる。メンゲレは膨大な医学的知識を持ち、学問に野心を抱いていた、ともヴィテクは述べている。

クラクフで無罪を言い渡されたＳＳ医、ハンス・ミュンヒはメンゲレから明らかに高く評価されていたが、年月がずいぶんたってから私が、なぜメンゲレはあのような犯罪ができたのかと尋ねたとき、ミュンヒはこう答えた。「メンゲレは、ドイツ人とユダヤ人が生死をかけて戦っていると信じていました。ユダヤ人は知的で、だからこそ危険な人種と見なしていて、ドイツ人はユダヤ人を根絶しなければならないと確信していたのです。スラブ人に対する彼の見方は、それとは違っていて、その点をメンゲレは区別していました」。

メンゲレは、絶滅収容所の囚人を人体実験に使ったＳＳ医の典型だと考えられている。しかし、あのようなことをしたのはメンゲレだけではない。ＳＳに所属していない医師の中にも、アウシュヴィッツで人体実験を行ないたいと願い出た者がいた。

もっとも著名なのはカール・クラウベルク教授である。1898年生まれで、産婦人科医として女性ホルモンの研究で名を成し、数々の国際的な産婦人科学会議で専門家として高い評価を受けていた。この高名な科学者に、絶滅収容所で研究せよと強要できたような人はいないだろう。残された書簡から判明したことだが、彼はアウシュヴィッツに収容されている女性を実験に使わせてほしいと、自らヒムラーに依頼したのである。クラウベルクは、手術をせず早く安価に女性を断種できる方法を探していた。ヒムラーはこの種の実験に興味を持ち、クラウベルクが何でも望み通りにすることを認めた。

クラウベルクが行なった数々の実験だけが犯罪的だったわけではない。それらの目標は、「負の人口政策」に役立つとされたのである。これは国家社会主義が組織したもっとも広範囲の犯罪を婉曲的に表す表現で、ヒムラーはこの言葉を好んで使った。全収容所の管理のトップが抱える問題、すなわち「好ましくない諸民族を根絶しながら、なおその労働力を軍備のために利用することは、いかにして可能か」という問題の答えを見つけることが、クラウベルクに求められた。彼のためにアウシュヴィッツ基幹収容所の第10ブロックが整備され、彼が要求していた女性も用意された。これらの女性たちは収容所の隠語で「モルモット」と呼ばれていた。

クラウベルクは実験の際には情け容赦なかったが、数名の女性は、ＳＳの暴力から彼が守ってくれたと証言している。彼はケーニヒスヒュッテの診療所所長だったので、アウシュヴィッツには不定期にしか来られず、そのため助手を何人か使っていた。たとえばシェーリング製作の従業員、ヨハネス・ゲーベルは、クラウベルクの注射に使う薬品を調達しなければならなかったが、クラウベルクはゲーベルを説得して、アウシュヴィッツに移住させてしまった。ゲーベルのために収容所周辺の一軒家を用意させ、ゲーベルは医者ではなかったにもかかわらず、一人で子宮内注射を行なうよう依頼した。

ゲーベルはこの仕事をこれ見よがしに誇示したので、シェーリング製作は彼を敬遠した。エドゥアード・ド・ヴィントはゲーベルの性格を次のように述べている。「彼は何にでも

首を突っ込み、どんな女性も容赦せず実験に服するよう強制した。まだクラウベルクの方が時には気遣いを見せ、あれこれの理由を挙げて止めてほしいと懇願する女性がいると、注射をせずに済ますこともあった。ゲーベルは粗野な皮肉屋だった。指導的立場に就くための訓練を受けていないのに、突然、大きな権力を手にした人間は了見が狭いものだが、彼はその典型だった」。ド・ヴィントはゲーベルの風采をありありと描いている。「彼は私服で、乗馬ズボンをはいていたが、ひょろひょろの足には全然似合っていなかった。軽いスポーツジャケットを着ているときは、大売出しで掘り出し物を手に入れた小役人のような感じがした」。

クラウベルクは囚人の中からも助手を引き抜いた。全力を挙げて人体実験に協力してもらうために、大きな野心を抱いたポーランド人の囚人医、ヴラーディスラフ・デーリングをクラウベルクが獲得した経緯はすでに述べた。彼はデーリングの釈放にこぎつけた後、その専門的知識を自分が利用できるよう確保した。ケーニヒスヒュッテの自分の診療所へデーリングを徴用させたのである。

クラウベルクはよく気の付く女中が欲しいがために、スロヴァキア出身の若いユダヤ人女性、シルヴィア・フリートマンに実験ブロックでの特権を与えた。彼女はそのブロックの囚人に対して広範囲にわたる全権を与えられた代わりに、クラウベルクの個人的用事も片付けなければならず、たとえばコーヒーやたばこを「調達」したり、セーターを編んだりした。それどころか、クラウベルクは３歳の娘を実験ブロックにまで連れてきて、「モルモット」たちに寸法をとらせ、娘のためにもセーターを編ませたことまであった。

終戦の兆しが見え始めると、クラウベルクは実験への関心を失って行った。自分の出世をもはやヒムラーが支援できないことを、理解したためのようだ。彼はますます飲酒に耽るようになった。戦後、クラウベルクは捕えられてロシアに引き渡され、そこで即決裁判により、当時、通例だった25年の自由刑の判決を受けた。1955年、他の人々と一緒に釈放されたが、ドイツで改めて彼に対する裁判が始まった。この定評ある産婦人科医があのような犯罪に走ったのはなぜか、という問いに対する一つの答えが、裁判記録から見出せる。

クラウベルクは少年の頃から身長が低かった（154㎝）ため、絶えず不利な扱いを受け、嘲りに抵抗しなければならなかったと陳述している。実際、背が低くずんぐりしているのに、わざと軍服のような私服を身にまとった彼の姿は、滑稽だった。キールの予審判事に対して、軍隊の階級もケーニヒスヒュッテの炭鉱労働者のための診療所での収入も、文書記録より水増しして申告していたのは、クラウベルクらしいことである。専門家によると、彼には過剰な自己顕示欲が認められた。クラウベルクの精神鑑定が要求されたのは、顕著な残忍さを示す過去のエピソードがいくつか浮かび上がってきたためである。たとえば学生のとき、彼は殺人容疑で取り調べられたが、後に射殺は正当防衛だったことが認められて告訴は見送られた。また実弾の入った猟銃で妻を脅したり、愛人にナイフを投げつけて、けがを負わせたりしたこともある。ロシアでの抑留から帰って４日後、妻に宛てた書簡で「おまえのヒモや家主に首を吊って死ぬ」ことを勧めないと、彼が自ら手を下すと脅迫した。「そうなると、比較的安らかな縊死では済まず、ひどく苦しむことになるだろう」。

ドイツでクラウベルクに対する訴訟が起きたのは、彼の自意識過剰のせいだった。つまり、ロシアでの抑留から帰還したとき、ドイツのテレビに自分は殉教者だと讃えさせ、それによって初めて人々は彼の存在に気づいたのである。さらにクラウベルクは、「科学的研究の継続」のため秘書を求む、という広告を新聞に出すことまでしている。

クラウベルクと競うようにしてアウシュヴィッツで実験を実施していたのは、ホルスト・シューマンである。クラウベルク同様、シューマンもＳＳ隊員ではない。彼は空軍医で、国家社会主義による最初の大虐殺作戦――隠蔽のため「安楽死」と呼ばれたこの作戦の犠牲者は、主として精神病の患者だった――で、その才能を見事に発揮したので、何の専門知識も持っていなかったにもかかわらず、断種実験を委任されたのである。クラウベルクが注射によって女性を断種しようとしたのに対し、シューマンは同じことを性器にレントゲンを照射して達成しようとした。シューマンは男性も実験に利用した。レントゲンの照射後、犠牲者の子宮ないし睾丸を手術で取り出させた。照射時間を変えることによって、これらの器官が傷ついた度合いも変化することを確かめるためである。クラウベルクと同じく、シューマンも実験が終わった後、「モルモット」がどうなるかは気にかけていなかった。シューマンの実験と外科手術は、クラウベルクの手法以上に犠牲者を衰弱させ、それゆえ実験後に生き延びるチャンスもさらに低かった。

シューマンは1906年生まれで、彼自身の表現によると生家は「愛国的で保守的」だったという。14歳のときすでに、ザクセンの内乱めいた衝突において、伝令となるべく志願した。「伝統に根ざした」撃剣組合の学生となり、1930年初頭、ナチ党に入党する。そしてふとした偶然から、彼は「安楽死」作戦に携わることになる。彼と同じ医者でかつての同級生が、この殺人組織に参加するのが嫌だったため、自分の代わりに、ばりばりのナチ党員のシューマンを組織運営者に推薦したのである。シューマンは全く躊躇しなかった。

グラーフェネックとゾネンシュタインの殺害施設の長として、シューマンは患者をガス室に入れた後、ガス栓を開き、患者が死に行くところを見ていなければならなかった。死へと定められた患者に、検査のための質問を行なったのは、「勉強を続けるためです。学ぶことはありましたから」と、彼は1970年、判事に確言している。また法廷で、精神病について判断を下せるような精神科の教育は受けていません、とずばり言い切っている。アウシュヴィッツで一連の実験を始めた時も、彼はレントゲンの扱い方を知らなかった。それゆえ専門家だったクラウベルクは、予審判事に向かってシューマンは犯罪者だと語ったが、自分も悪いことをしたとは感じていないようだった。

シューマンも、助手として引き入れた囚人を好意的に扱った。たとえばスタシェク・スレザクが進んで協力し、レントゲン器械の手入れをしてくれるようにするため、シューマンは彼の釈放のために尽力すると約束した。しかしクラウベルクはデーリングとの約束を守ったが、シューマンはこの約束のことをそれほど真剣に考えていなかった。あるいは教授だったクラウベルクほどの影響力がなかったのかもしれない。スレザクは収容所内に留まり、実験が終わると、機密を知ってしまった人間の運命が待ち受けていたのである。

同様にアウシュヴィッツで人体実験を行なったエーミール・カシュープも、ＳＳ隊員で

はない。彼はオーバーシュレージエンの出身で、ドイツ国防軍の士官候補生だった。カシュープの「モルモット」がいた部屋で世話係をしていたフランス人弁護士のステルンによると、彼は「外見は感じのいい」27歳の医学生で、ブレスラウで衛生部に配属していた。カシュープの地位はシューマンや、ましてやクラウベルクほど高くはなく、またアウシュヴィッツにいた期間もこの二人ほど長くはない。カシュープが実験を実施したのは、ほんの数週間だけである。フェイキエルの記憶では膿や腐敗膿や何か分からない化学薬品を用いて、カシュープは皮下注射と塗擦を行い、被験者に蜂巣炎を起こさせ、繰り返し写真を撮ってから切開した。傷口から取り出した体液は、ブレスラウへ送られた。この実験によって、国防軍の兵役を逃れたがっている人のために、病気を引き起こせる方法を発見しようとフェイキエルは思っていた。

カシュープが、ある被験者の写真をもう一度撮ろうとした時のことだ。ひどい熱を出していたその犠牲者が、撮影のために苦しんでいるのは明らかだった。すると彼は、助手をしなければならなかったステルンにこう言った。「僕の言うことを信じて欲しいんですが、僕だってあなたと同じように、こんなことは嫌なんです。でも、これをやらなければならないんです」。この言葉からしても、小物の士官候補生だったカシュープは、クラウベルク教授や空軍将校のシューマンとは異なっている。後の二人は決して「これ」を「やらなければならなかった」わけではない。またこの二人から似たような発言を聞いた者もいないのである。

多くの点で他の収容所医とは異なるものの、やはりアウシュヴィッツにいた期間を利用して、「副次的に生じる人的資源」で実験を行なった医師がいる。それはヨハン・パウル・クレーマーである。1942年８月、学期終了後の長期休暇の間、アウシュヴィッツへ行くよう命令を受けたとき、彼は59歳で、つまり他の大半のＳＳ医とは別の世代に属していた。1935年以後、ミュンスター大学で解剖学の助教授をしていたクレーマーは、絶滅収容所で働く唯一の大学教授だった。アウシュヴィッツでの出来事に対する自分の反応を、彼は日記に書きとめている。

日記によると、クレーマーは降車場での選別と、それに引き続いて行なわれたガス殺に14回参加している。アウシュヴィッツに到着して３日目の９月２日、初めて「特別作戦」に引き入れられた時の印象が、「これと比べれば、ダンテの描く地獄も茶番に見えてしまうほどだ」と書かれている。さらにその三日後、女性収容所での選別は「身の毛もよだつ極めつけのショック」だと語り、アウシュヴィッツを「世界の肛門」と呼んだ同僚のティロに同意している。10回目の選別とガス殺に立ち会った10月12日、「最後の掩蔽施設の前で繰り広げられたゾッとする光景！（ヘスラー）」と書き記したクレーマーは、５年近くたってからクラクフの予審判事に、この一文を次のように説明した。「今でも覚えていますが、ヘスラーはグループ全部（オランダ人1600人）を一つの掩蔽施設に追い込もうとしたんです。どうしても押し込めない囚人が一人だけ残ってしまったので、ヘスラーはピストルで射殺しました」。６日後、クレーマーはまたもや「むごたらしい光景」という表現を日記に書き入れている。若くて健康なオランダ人女性三名が掩蔽施設の前で命乞いをし

たけれども、その場で射殺されたのである。

老年の域に差しかかり、明らかに大量殺戮を快く思っていなかった大学教授の行動を、この日記は覗かせてくれる。もっとも、大量殺戮が嫌だといっても、その不快感はそれほど大きなものではなかったようだ。というのもクレーマーは、絶滅作戦について手短に記したすぐ後で、様々な料理のことを事細かに書いているからである。

クレーマーはその頃、「飢餓状態における筋肉組織の変化について」という論文で大学教授資格を得ていた。アウシュヴィッツに派遣される直前に発表されたまた別の論文では、実験的な飢餓による冷血動物の細胞の変化を記述している。こうした彼の研究が、アウシュヴィッツの医務長の耳に入った。何年もたってからクレーマーは、「フェノール注射で殺された囚人から活きのいい材料を研究のために取り出せる、と医務長に言われました」と陳述している。強要せずともクレーマーは実験に手を出したと思われる。

ポーランドでの勾留中、クレーマーは次のように語った。「飢餓が非常に進行しているため私の目を引く病人がいると、衛生兵に申告して、その病人を私のために別扱いし、注射で殺す日時を教えてもらうようにしました。私が選んだ病人を殺害するときが来ると、その者はブロックにまで連れてこられ、まだ生きているうちに解剖台の上に載せられます。そして私が近づいて、研究のために重要なこまごましたことを病人に尋ねるのです。たとえば収容される前の体重とか、収容中に減った体重とか、最近薬を飲んだか、といったことです。私がこうしたデータを採ると、衛生兵がやって来て、心臓の辺りに注射をして患者を殺します。私自身は決して注射で殺害したことはありません。解剖台から少し離れたところで容器を準備して待っていました。注射による死の兆候が見えるとすぐに囚人医が肝臓と膵臓の一部を取り出し、それを私が保存液を満たした容器に入れます。体から標本を採るために殺される患者の写真を撮らせることも時にはあり、標本と写真はミュンスターの自宅へ持ち帰りました」。

こうしたことはクレーマーの日記では手短に、「本日、人間の肝臓、脾臓ならびに膵臓の活きのいい材料を指定」と書かれている。同様の記載は何度も繰り返し登場する。

ポーランド人の囚人医、ヴラーディスラフ・フェイキエルの報告によると、ある日クレーマーは研究のために、飢えて衰弱している囚人を二人欲しいと言ってきた。フェイキエルは何の疑念も持たず、二人の患者を探し出した。というのもクレーマーが博士であることは収容所では知れ渡っており、フェイキエルは大学教授が犯罪的な行為に手を染めるとは、思ってもみなかったからである。後になってフェイキエルは、二人の囚人が殺された挙句、解剖されたことを知らされた。

クレーマーは短期間のアウシュヴィッツ滞在を、科学的研究のためだけに利用したわけではなかった。10月16日の日記には御丁寧にも、「今日の午後、300マルク相当の二番目の小包を保管のためヴィーツェマン夫人（ミュンスターの知人）宛てに発送」と記し、欄外に「石鹸、フレーク石鹸、穀物加工品」と付け足している。11月17日には五番目の小包の中身を列挙しているが、こちらはずい分と盛り沢山である。「ブランデー２本、ビタミン剤と強壮剤、かみそりの刃、洗濯石鹸と髭剃り用石鹸、体温計、爪切り、ヨードチンキ、

96%のアルコールに入れた標本、レントゲン写真、肝油、筆記用具、封筒、香水、かがり糸、針、歯磨き粉などなど」。その後、どこからこうした品を手に入れたのかを尋ねられたとき、クレーマーは殺された人々の所有物を盗んでいながら、「囚人たちが私のポケットを一杯にしてくれるのを、断りきれませんでした」と言い繕っている。

とはいえクレーマーは、私腹を肥やせる予想外の大きなチャンスゆえにアウシュヴィッツに留まりたがった連中とは、一線を画している。1942年９月５日、アウシュヴィッツから出した手紙の中で、「じきにプラハへ行くことを望んでいます。ここには心惹かれるようなことは何もありません」と書いているからである。

囚人に対してクレーマーは、横柄でもなければ粗野でもなかった。彼は敬称で話しかけていたが、これは珍しい例外である。クレーマーが病棟で選別を担当すると、犠牲者の数はエントレスが選別をする時よりたいてい少なかった。

学期終了後の長期休暇が終わると、クレーマーは元の大学へ帰って行った。アウシュヴィッツを後にして２ヶ月もたたない頃の日記に、「ドイツ人であることが恥ずかしく思えるほどだ」という記載がある。そう書いたのは、せっかく努力していたのに遺伝生物学講座の担当になれなかったからである。「永遠の正義や摂理などあるのだろうか。私たちの髪の毛一本も、そのお方の意志がなければ落ちないような主なる神など、存在するのだろうか」。この問いを彼が書きとめたのは、ガス室を覗き込んだからではなく、1943年秋、ミュンスターが爆撃されたためである。

アメリカ軍がミュンスターに進駐し、戦争は終わったが、クレーマーは几帳面に日記を付け続けた。最後の記載には1945年８月11日の日付が打ってある。その５日前にミュンスターの瓦礫処理を命じられた時、彼は憤って「ＳＳ医だったばかりに、こんなことを我慢してやらなくてはならない」と書いている。どうやらアウシュヴィッツの「むごたらしい光景」をすっかり抑圧してしまったらしい。アウシュヴィッツを離れた後、彼は収容所や自分が協力した大量殺戮には一言も触れていない。実際、自らの所業について、この日記に自分が書きとめたことを、全く忘れてしまったようだ。イギリスでの抑留中に、自宅で日記を発見したと知らされた時、彼は喜んだ。自分はナチ政府に冷遇されていたこと、それゆえこの政府に忠実に従ったとは見なせないことを示す証拠が、これで手に入ったと思ったからである。

クレーマーの例が証明しているように、知的教育を受けた人間でさえ、罪の意識を完全に抑圧することがある。彼はポーランドで恩赦を受けた後、ミュンスターで懲役10年の刑を言い渡された。裁判長はこの刑罰の根拠を次のように述べている。「結局のところ彼自身ではいかんともしがたい事情によって、こうした犯行が生じた状況に置かれなかったなら、クレーマーは今日、無罪でいられただろう。彼が罰せられるようになったのは、抗わず、拒否しなかったからである」。さらに、大量殺戮をおぞましいと感じていながら、憚ることなく参加したからだ、と付言すべきだろう。彼が取り出した「活きのいい材料」と盗品を詰めた小包のことを考えていただきたい。

刑期をすでに終えた81歳のクレーマーは、再び法廷に召喚された。フランクフルトで今度は証人として、日記の内容に対して立場を明らかにするよう求められたのである。問題

となった箇所には、多くのＳＳ隊員が余分の配給をもらうためにガス殺作戦の参加に追い込まれた、と記されていた。にこやかに微笑みながら、高齢のクレーマーは答えた。「これは人間的にはよく理解できることです。なんと言っても戦争でしたから、タバコも酒も乏しくて。もしタバコ中毒だったら……」。

ヘルムート・フェッターも、アウシュヴィッツにいた期間を利用して人体実験を行なった。彼は1910年、テューリンゲンの生まれで、ＳＳ医として強制収容所への配属を命じられる以前は、レーヴァークーゼンのＩＧファルベン社に勤めていた。その関係を維持していたため、傘下のバイアー社からは退社後も、囚人を使って試験するよう新薬が送られてきた。フェッターは命令には含まれていなかったこうした実験を非常に熱心に監督し、一連の実験の対象となった病人に別の薬を与えることを禁止した。それどころかマウトハウゼン・グーゼン収容所に転属されてからも、その後の実験結果を知るためにアウシュヴィッツへやって来た。看護人のスタニスラフ・グロジンスキーは、「実験が終わると、彼はもはやこうした病人の運命に興味を示さなかった」と言っている。グーゼンでもフェッターは、同様の人体実験を続行した。それゆえ後にニュルンベルクの軍事法廷で弁明しなければならなくなった時、数々の記録が提出された。そこから明らかになったある実験では、試験的に新薬を与えられた75名のうち40名が死んでいた。

フェッターは死刑判決を受けてから、私を見つけ出して欲しいと兄弟に書き送った。「ラングバインさんなら、救えるものを救うために私が尽力したことを証明できる。私はユダヤ人を人間として、患者として見ていたし、だからこそ治療もしたのだ」。私が始めてフェッターと会ったのはダッハウで、アウシュヴィッツで再会したわけだが、ダッハウでは彼は患者に関する私の願いを少なからずかなえてくれたし、職務以外の話を私としたがった。そのことを覚えていて、私の助力を期待したのだろう。フェッターはアウシュヴィッツで自分が「モルモット」にしたのは、たいてい私の知り合いのユダヤ人だったことを抑圧してしまったようだ。ソニャ・フィッシュマンが伝えたエピソードによると、支給されたパンに黴が生えているのを指摘されたフェッターは、黴は体にいいと言い放ったそうだ。